

女子大学生における父親に対する嫌悪感

——コミュニケーションを通して形成される関係性を中心として——

● 阿部 洋子

キーワード：

嫌悪感、父親との関係性、コミュニケーション、両親の仲の良し悪し

要約

女子大学生を対象に質問紙を用い、父親に対する娘の嫌悪感について、コミュニケーションの内容と両親の仲の良し悪しが促進的・抑制的に影響するかについて検討した。その結果、①父親に対する嫌悪感尺度の平均評価点の高い項目は、娘のベッドで昼寝をすることなど、父親が、児童期まで行っていた行為を、青年期になった娘に対しても行うことで起きると考える。不潔感ではなく、男性と感じるが故の嫌悪感が高得点を示しており、この点を父親側が配慮すべきではないかと考える。②父親に対する嫌悪感尺度は、4因子が抽出されたが、質問項目はこれまでの調査とは組み込まれ方が異なり、安定した結果が得られない。今後、精査する必要がある。③父親に対する嫌悪感の4因子全てに対して、日常生活における父娘の頻繁な「自己開示」および「ビジネスライク」なコミュニケーションが嫌悪感を低めることに関係している。日常生活での、さり気ないコミュニケーションを取ることが、父親に対する嫌悪感の抑制に繋がると考える。④「父親との直接的・間接的な接触」と「飲食を通しての接触」など様々な接触行為に対する嫌悪感には、両親の仲の良さが抑制的に働くと考える。

I. 目的

父親に対する嫌悪感について調査を実施した結果、因子構造が安定しないという問題を感じている。そのために質問項目を精査する必要があると感じている。また女子大学生においては、母親との関係性から、父親に対する嫌悪感には両親の仲の良し悪しと関係していると考えられる。しかし、それを超えて父親とのコミュニケーションが円滑になされていることで、関係性が良好であるかもしれない。これらについて、検討をするため調査、分析を実施することにした。

II. 方法

1. 調査対象者と調査時期

埼玉県内にある A 大学の女子学生61名 (19~21歳、Me.=19.38歳、SD=0.55) に対し、平成28 (2016) 年11月、授業時間中に、質問紙を配付し、調査者が口頭で調査の説明および協力依頼を行った。その際、調査への協力は任意であり、協力の無い場合も不利益を被らない (例えば、成績には無関係であることなど)、回答は無記名であり、結果は統計的処理を行うため、個人の回答が特定されないことなどを伝えた。また質問文を読み、調査対象者が心理的負担を感じた場合は、直ちに調査用紙への回答を中断してよいこと。調査用紙の回収は授業時間終了時に、教室の前方の机の上に、ランダムに置いてもらうようにし、個人が特定できないよう配慮することも伝えた。更に、同一内容を、調査用紙の表紙にも明記した。以上、質問紙への回答をもって、調査への同意を得たものとした。

2. 質問紙の構成

(1) 父親に対する嫌悪感尺度：嫌悪感尺度として、小野寺 (1984)、石丸 (2013) などの調査用紙が既に存在するが、前回の2度に亘る調査 (阿部；2016, 2017) では、父娘の間で、日常生活の中で、実際に起こる可能性の高い行為が提供されている菅生 (2001) の調査項目を用い、「全く気にならない：1点」から「非常に嫌だ：5点」までの5件法で回答を求めた。2回の調査結果では、因子構造が異なる結果が得られた。そこで、同じ尺度を用い、2016年6月の調査実施の数か月後に、異なる調査対象者ではあるが、同一学年において調査を実施し、因子構造の安定性について検討したいと考えた。

(2) 父親との直接的コミュニケーション尺度：前回の調査 (阿部；2017) と同様に、板倉 (2013) によって作成された「母子間の直接的コミュニケーション尺度」10項目を、父親に対するコミュニケーション尺度として用いることにした。「父親に対する嫌悪感尺度」21項目中、5項目にコミュニケーションに関する質問が含まれていたことから、父娘の間に交わされるコミュニケーションに関する独立した尺度を用いることが重要だと考えた。板倉 (2013) は、単因子構造としているが、著者がクラスタ分析により検討した結果では、4つのクラスタが抽出された (2017)。そのため、今後、この尺度を使用するにあたり、その因子構造ならびに安定性について検討したいと考え、この尺度を用いることにした。

(3) 夫婦仲の良し悪し：著者の2度に亘る調査 (阿部；2016, 2017) と同様に、両親の仲の良し悪しについて「非常に仲が悪い (1点)」から「非常に仲が良い (4点)」までの

4件法で回答を求めた。「どちらともいえない」を含めた5件法で実施した際、回答率が17.8%と低かった(阿部;2016)ため、前回の調査と同様に4件法で実施した(阿部;2017)。

Ⅲ. 結果

1. 父親に対する嫌悪感得点と因子構造

(1) 父親に対する嫌悪感得点

父親に対する嫌悪感尺度21項目について得点化を行った。嫌悪感が強ければ高得点になる(21~105点)ように評価点を設定した。

その結果、3,000点以上の高得点を示した項目は、「No.5 あなたの布団(ベッド)で父親が昼寝をする」(Me.=3.820点、SD=1.408)、「No.13 父親が使った割り箸を使う」(Me.=3.525点、SD=1.588)、「No.20 父親があなたに「女らしくなったね」と言う」(Me.=3.197点、SD=1.536)、「No.12 父親の飲みかけの缶ジュースを飲む」(Me.=3.148点、SD=1.621)の4項目であった。これは、得点は若干異なるものの、前回の調査(2016年6月)と同じ項目が抽出された。

一方、2,000点以下の低得点を示した項目は、「No.16 お父さんと一緒にテレビをみながら話をする」(Me.=1.967点、SD=1.426)、「No.21 洗濯後のお父さんの下着をたたむ」(Me.=1.967点、SD=1.329)、「No.18 お父さんが自分の子供の頃の話をする」(Me.=2.000点、SD=1.402)、「No.6 あなたの下着とお父さんの下着を一緒に洗う」(Me.=2.000点、SD=1.342)の4項目であった。得点は若干異なるものの、前回の調査(2016年6月)で下位4項目と同じ項目が抽出された。

(2) 父親に対する嫌悪感の因子構造(表1)

父親に対する嫌悪感尺度21項目について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子構造を検討した。その結果、固有値1,000以上の因子として、4因子が抽出された。

第1因子は、「No.3 お父さんのぬくもりの残るところに座る」、「No.4 電車であなたのすぐ隣にお父さんが座る」、「No.1 お父さんの肩をもむ」、「No.6 あなたの下着とお父さんの下着を一緒に洗う」、「No.21 洗濯後のお父さんの下着をたたむ」などが高い因子負荷量を示した。5項目からなるこの因子は、父親との直接的・間接的な接触に関連する項目であることから、第1因子は「父親との直接的・間接的な接触に対する嫌悪感」と命名した。

表1. 父親に対する嫌悪感尺度の項目と因子負荷量（主因子法、プロマックス回転）

質問項目	第1因子： 直接的・間接的 な接触	第2因子： 男性を 感じさせる 会話や接触	第3因子： だらしなさ、 所在無さ	第4因子： 飲食を 通しての接触	平均値	標準偏差	共通性
お父さんのぬくもりの残るところに座る	0.8997	-0.0027	-0.1589	0.1739	2.459	1.523	0.8011
電車であなたのすぐ隣にお父さんが座る	0.8445	-0.0338	0.2339	-0.0501	2.066	1.436	0.8979
お父さんの肩をもむ	0.7065	0.1975	0.0242	-0.0525	2.361	1.472	0.7660
あなたの下着とお父さんの下着を一緒に洗う	0.6637	-0.1925	0.3348	0.0907	2.000	1.342	0.7701
洗濯後のお父さんの下着をたたむ	0.5233	0.0844	0.0978	0.0895	1.967	1.329	0.6654
お父さんが自分の好みの女性のタイプについて話をする	-0.1693	0.9806	0.0527	-0.0258	2.918	1.441	0.7784
お父さんがあなたに「女らしくなったね」と言う	0.0679	0.8717	-0.0743	0.0069	3.197	1.536	0.7864
あなたの布団（ベッド）でお父さんが昼寝をする	0.1481	0.5436	-0.0600	0.1775	3.820	1.408	0.5869
あなたが新聞を読んでいる時、お父さんがのぞきこむ	0.3786	0.5151	-0.1571	0.2367	2.918	1.615	0.7881
熱があるとき、お父さんがあなたのおでこに手をあてる	0.1298	0.4761	0.2540	0.1575	2.754	1.640	0.7211
お父さんが自分の子供の頃の話をする	0.0405	0.3816	0.3774	0.0951	2.000	1.402	0.7322
お父さんがだらしない格好でごろごろする	-0.0268	-0.1303	0.7635	0.2405	2.148	1.340	0.6594
お父さんと一緒にテレビを見ながら話をする	0.2725	0.2782	0.5672	-0.1267	1.967	1.426	0.8880
居間にお父さんと二人きりである	0.3283	0.2465	0.5375	-0.1034	2.197	1.547	0.8652
一日の出来事についてお父さんと話をする	0.4264	0.1740	0.4753	-0.0173	2.082	1.418	0.8795
お父さんが酔っ払って帰ってくる	-0.1090	-0.1359	0.4550	0.3743	2.656	1.569	0.5238
お父さんが入ったお風呂のすぐ後に入る	0.1223	0.2247	0.3357	0.2333	2.557	1.597	0.6344
お父さんが使った割り箸を使う	-0.0170	0.0613	0.1480	0.7788	3.525	1.588	0.7954
お父さんの飲みかけの缶ジュースを飲む	0.0366	0.1892	0.0837	0.7107	3.148	1.621	0.8466
お父さんが箸をつけた物を食べる	0.3304	0.0413	0.0706	0.5853	2.525	1.608	0.7990
お父さんがおなら・げっぷを遠慮なくする	0.1066	0.0378	0.3688	0.3786	2.951	1.465	0.6028
固有値	11.8300	1.5089	1.2682	1.0276			
寄与率	56.33%	7.19%	6.04%	4.89%			
累積寄与率	56.33%	63.52%	69.56%	74.45%			
第1因子	—	0.6265	0.6052	0.5311			
第2因子		—	0.4899	0.4648			
第3因子			—	0.3586			
第4因子				—			

第2因子は、「No.19 お父さんが自分の好みの女性のタイプについて話をする」、「No.20 お父さんがあなたに「女らしくなったね」と言う」、「No.5 あなたの布団（ベッド）でお父さんが昼寝をする」、「No.2 あなたが新聞を読んでいる時、お父さんがのぞきこむ」、「No.10 熱があるとき、お父さんがあなたのおでこに手をあてる」などが高い因子負荷量を示した。5項目からなるこの因子は、父親としてというよりは、むしろ男性を感じさせる項目であることから、第2因子は「男性を感じさせる会話や接触に対する嫌悪感」と命名した。

第3因子は、「No.9 お父さんがだらしない格好でごろごろする」、「No.16 お父さんと一緒にテレビを見ながら話をする」、「No.15 居間にお父さんと二人きりである」、「No.11 お父さんが酔っ払って帰ってくる」、「No.7 お父さんが入ったお風呂のすぐ後に入る」などが高い因子負荷量を示した。5項目からなるこの因子は、だらしなさに関する項目と、取り立てて話題もないのに二人で部屋にいることからくる所在無さであることから、第3因子は「所在無さと父親のだらしなさに対する嫌悪感」と命名した。

第4因子は、「No.13 お父さんが使った割り箸を使う」、「No.12 お父さんの飲みかけの

缶ジュースを飲む]、「No.14 お父さんが箸をつけた物を食べる」などが高い因子負荷量を示した。3項目からなるこの因子は、飲食を通しての接触であることから、第4因子は「飲食を通しての接触に対する嫌悪感」と命名した。

以上、21項目中18項目が抽出された。残りの3項目の因子負荷量は、「No.17 一日の出来事についてお父さんと話をする」は第1因子 (0.4264) と第3因子 (0.4753) と近似した値を示し、「No.18 お父さんが自分の子供の頃の話をする」は第2因子 (0.3816) と第3因子 (0.3774) と近似した値を示し、「No.8 お父さんがおなら・げっぷを遠慮なくする」は第3因子 (0.3688) と第4因子 (0.3786) と近似した値を示したため、これ以降の分析から、データを除外することとした。

なお、これらの3項目は、嫌悪感の平均得点からみると、「No.17 一日の出来事についてお父さんと話をする」は $Me.=2.082$ 点 ($SD=1.418$)、「No.18 お父さんが自分の子供の頃の話をする」は $Me.=2.000$ 点 ($SD=1.402$) と嫌悪感得点は低く、「No.8 お父さんがおなら・げっぷを遠慮なくする」は $Me.=2.951$ 点 ($SD=1.465$) と嫌悪感得点は高いという結果であった。

2. 父親との直接的コミュニケーション尺度得点と因子構造

(1) 父親との直接的コミュニケーション尺度得点

板倉 (2013) によって作成された「母子間での直接的コミュニケーション尺度」(10項目)を、前回の調査 (2016年6月実施) に引き続き、父親を対象にして実施した。頻繁にコミュニケーションを交わしている場合は高得点になる (10~50点) ように評価点を設定した。

その結果、3,000点以上の高得点を示した項目は、「No.2 家族内で話題になっていることを話す」($Me.=3.311$ 点、 $SD=1.373$)、「No.7 用事をお願いする」($Me.=3.279$ 点、 $SD=1.473$)、「No.1 父親に対して反対意見を言う」($Me.=3.279$ 点、 $SD=1.157$)、「No.3 趣味のことを話す」($Me.=3.066$ 点、 $SD=1.493$) の4項目であった。

一方、2,000点以下の低得点を示した項目は、1項目も抽出されなかった。

(2) 父親との直接的コミュニケーション尺度の因子構造 (表2)

その結果、板倉 (2013) は単因子構造であると述べているが、前回 (2016年6月実施) の結果では、下位構造を知ることが必要であると考え、クラスタ分析を実施したところ、4つのクラスタが抽出された。そこで今回は因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を

表2. 直接的コミュニケーションの因子構造（主因子法・プロマックス回転）

No.	質問項目	第2因子：		平均	標準偏差	共通性
		第1因子： 自己開示	ビジネスライクな 会話			
4	最近、興味をもっていることについて話す	0.9801	-0.0165	2.902	1.567	0.9106
5	友人との間で起きたことについて話す	0.9352	-0.0042	2.557	1.489	0.9126
3	趣味のことを話す	0.9277	-0.0774	3.066	1.493	0.7927
9	日常での人間関係について話す	0.8982	0.0377	2.492	1.456	0.9094
2	家族内で話題になっていることを話す	0.6530	0.2197	3.311	1.373	0.6828
8	お互いについて思ったことや、感じたことを話す	0.6233	0.3097	2.721	1.439	0.8043
10	してほしいことや、やりたいことを提案する	0.4441	0.4088	2.902	1.480	0.6325
7	用事をお願いする	0.0733	0.8343	3.279	1.473	0.6554
6	明日の予定について話す	0.3363	0.4672	2.787	1.485	0.6202
1	父親に対して反対意見を言う	-0.0506	0.3152	3.279	1.157	0.2123
	固有値	6.5615	1.0563			
	寄与率	65.61%	10.56%			
	累積寄与率	65.61%	76.18%			
	第1因子	—	0.6578			
	第2因子		—			

行い、因子構造を検討することにした。

その結果、固有値1.000以上の因子として、2因子が抽出された。

第1因子は、「No.4 最近、興味をもっていることについて話す」、「No.5 友人との間で起きたことについて話す」、「No.3 趣味のことを話す」、「No.9 日常での人間関係について話す」、「No.2 家族内での話題になっていることを話す」、「No.8 お互いについて思ったことや、感じたことを話す」などが高い因子負荷量を示した。6項目からなるこの因子は、一見するとたわいもない会話であるかもしれないが、父親に対して娘が自身の内面を語っている項目であることから、第1因子は「自己開示」と命名した。前回の調査（2016年6月実施）では、第2、3クラスタに分かれて抽出されたものが合成された形で抽出された。

第2因子は、「No.7 用事をお願いする」、「No.6 明日の予定について話す」、「No.1 父親に対して反対意見を言う」などが高い因子負荷量を示した。3項目からなるこの因子は、用事や予定を語っている項目であることから、第2因子は「ビジネスライクな会話」と命名した。前回の調査（2016年6月実施）では、第4クラスタとして抽出された2項目と、第1クラスタとして抽出された1項目が合成された形で抽出された。その1項目は「No.1 父親に対して反対意見を言う」であり、第1因子の因子負荷量は小さくしかもマイナス（-0.0506）を示した。

以上、10項目中9項目が抽出された。残りの1項目である「No.10 してほしいことや、

やりたいことを提案する」の因子負荷量は、第1因子 (0.4441) と第2因子 (0.4088) と近似した値を示したため、これ以降の分析から、データを除外することとした。

なお、この1項目は、コミュニケーションの平均得点からみると、 $Me.=2.902$ 点 ($SD=1.480$) とコミュニケーション得点は比較的高く、頻繁に交わされるコミュニケーションであるという結果であった。

3. 両親の仲の良し悪し

両親の仲の良し悪しについて回答を求めた。その結果、「非常に良い」(11名、18.03%) と「良い」(32名、52.46%) に回答した「両親の仲が良い」群は、61名中43名 (70.49%) であった。一方「悪い」(13名、21.31%) と「非常に悪い」(5名、8.20%) に回答した「両親の仲が悪い」群は、61名中18名 (29.51%) であった。

4. 父親に対する嫌悪感と直接的コミュニケーション尺度得点との関係 (クロス集計)

先ず、父親に対する嫌悪感尺度の合計得点について因子ごとに上位群、下位群を求めたところ、第1因子 ($Me.=10.85$ 点、 $SD=6.137$) の合計得点 (5~25点) の上位群は、10点以上の27名であり、下位群は、9点以下の34名であった。

第2因子 ($Me.=15.61$ 点、 $SD=6.522$) の合計得点 (5~25点) の上位群は、16点以上の30名であり、下位群は、15点以下の31名であった。

第3因子 ($Me.=11.52$ 点、 $SD=5.807$) の合計得点 (5~25点) の上位群は、11点以上の29名であり、下位群は、10点以下の32名であった。

第4因子 ($Me.=9.197$ 点、 $SD=4.396$) の合計得点 (3~15点) の上位群は、10点以上の29名であり、下位群は、9点以下の32名であった。

次に、父親に対する直接的コミュニケーション尺度の合計得点について因子ごとに上位群、下位群を求めたところ、第1因子 ($Me.=17.05$ 点、 $SD=8.009$) の合計得点 (6~30点) の上位群は、17点以上の31名であり、下位群は、14点以下の30名であった。

第2因子 ($Me.=9.34$ 点、 $SD=3.15$) の合計得点 (3~15点) の上位群は、10点以上の35名であり、下位群は、9点以下の26名であった。

これらの結果から、父親に対する嫌悪感の4つの因子の合計得点の上位群・下位群と、直接的コミュニケーション尺度の2つの因子の合計得点の上位群・下位群との関係についてクロス集計 (χ^2 検定) を用いて、その分布状態を検討した。

(1) 嫌悪感の第1因子とコミュニケーション尺度の因子との関係

嫌悪感尺度の第1因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の高得点群が有意に多く分布し、更に、嫌悪感尺度の第1因子の高得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の低得点群が有意に多く分布した ($\chi^2=8.7027$, $p<0.01$ 、Yatesの補正： $\chi^2=7.2481$, $p<0.01$)。

嫌悪感第1因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第2因子の高得点群に有意に多く分布した ($\chi^2=5.4821$, $p<0.05$ 、Yatesの補正： $\chi^2=4.3296$, $p<0.05$)。

(2) 嫌悪感の第2因子とコミュニケーション尺度の因子との関係

嫌悪感第2因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の高得点群が有意に多く分布し、更に、嫌悪感第2因子の高得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の低得点群が有意に多く分布した ($\chi^2=17.8443$, $p<0.001$ 、Yatesの補正： $\chi^2=15.7459$, $p<0.001$)。

有意差はみられなかったが、嫌悪感尺度の第2因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第2因子の高得点群が多く分布し、嫌悪感尺度の第2因子の高得点群にコミュニケーション尺度の第1因子の低得点群が有意に多く分布した ($\chi^2=1.3136$, n.s.、Yatesの補正： $\chi^2=0.7871$, n.s.)。

(3) 嫌悪感の第3因子とコミュニケーション尺度の因子との関係

嫌悪感尺度の第3因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の高得点群が有意に多く分布し、更に、嫌悪感尺度の第3因子の高得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の低得点群が有意に多く分布した ($\chi^2=24.9386$, $p<0.001$ 、Yatesの補正： $\chi^2=22.4433$, $p<0.001$)。

嫌悪感尺度の第3因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第2因子の高得点群が多く分布し、更に、嫌悪感尺度の第3因子の低得点群にコミュニケーション尺度の第2因子の低得点群が少なく分布した ($\chi^2=8.5479$, $p<0.01$ 、Yatesの補正： $\chi^2=7.0993$, $p<0.01$)。

(4) 嫌悪感の第4因子とコミュニケーション尺度の因子との関係

嫌悪感尺度の第4因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の高得点群が有意に多く分布し、更に、嫌悪感尺度の第4因子の高得点群に、コミュニケーション尺度の第1因子の低得点群が有意に多く分布した ($\chi^2=11.9394$, $p<0.001$ 、Yatesの補正： $\chi^2=10.2331$, $p<0.05$)。

嫌悪感尺度の第4因子の低得点群に、コミュニケーション尺度の第2因子の高得点群が多く分布し、更に、嫌悪感尺度の第4因子の低得点群にコミュニケーション尺度の第2因子の低得点群が多く分布した ($\chi^2=11.8481$ 、 $p<0.001$ 、Yatesの補正： $\chi^2=10.1308$ 、 $p<0.01$.)。

5. 父親に対する嫌悪感と両親の仲の良し悪し (クロス集計)

(1) 嫌悪感尺度の第1因子と両親の仲の良し悪しとの関係

嫌悪感尺度の第1因子の低得点群に、両親の仲が良いと回答した者(28名、45.90%)が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者(6名、9.84%)が少なく分布した($\chi^2=5.1954$ 、 $p<0.05$ 、Yatesの補正： $\chi^2=3.9869$ 、 $p<0.05$)。

(2) 嫌悪感尺度の第2因子と両親の仲の良し悪しとの関係

嫌悪感尺度の第2因子の低得点群に、両親の仲が良いと回答した者(25名、40.98%)が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者(6名、9.84%)が少なく分布した($\chi^2=3.1240$ 、 $p<0.10$ 、Yatesの補正： $\chi^2=2.2103$ 、 $p<0.10$)。

(3) 嫌悪感尺度の第3因子と両親の仲の良し悪しとの関係

嫌悪感尺度の第3因子の低得点群に、両親の仲が良いと回答した者(26名、42.62%)が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者(6名、9.84%)が少なく分布した($\chi^2=3.7452$ 、 $p<0.10$ 、Yatesの補正： $\chi^2=2.7363$ 、 $p<0.10$)。

(4) 嫌悪感尺度の第4因子と両親の仲の良し悪しとの関係

嫌悪感尺度の第4因子の低得点群に、両親の仲が良いと回答した者(26名、42.62%)が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者(6名、9.84%)が少なく分布した($\chi^2=3.7452$ 、 $p<0.10$ 、Yatesの補正： $\chi^2=2.7363$ 、 $p<0.10$)。

6. 父親に対する嫌悪感と両親の仲の良し悪し

(1) コミュニケーション尺度の第1因子と両親の仲の良し悪しとの関係

コミュニケーション尺度の第1因子である「自己開示」の高得点群に、両親の仲が良いと回答した者(27名、44.26%)が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者(4名、6.56%)が少なく分布した ($\chi^2=8.3554$ 、 $p<0.05$ 、Yatesの補正： $\chi^2=6.8110$ 、 $p<0.05$)。

(2) コミュニケーション尺度の第2因子と両親の仲の良し悪しとの関係

コミュニケーション尺度の第2因子である「ビジネスライクな会話」の高得点群に、両

親の仲が良いと回答した者（29名、47.54%）が多く分布し、両親の仲が悪いと回答した者（6名、9.84%）が少なく分布した（ $\chi^2=6.0361$ 、 $p<0.05$ 、Yatesの補正： $\chi^2=4.7219$ 、 $p<0.05$ ）。

7. 父親に対する嫌悪感、直接的コミュニケーションおよび両親の仲の良し悪しとの関係 (重回帰分析)

父親に対する嫌悪感の因子ごとの合計得点と、直接的コミュニケーションの因子ごとの合計得点、および両親の仲の良し悪しとの関係について、重回帰分析を実施し、何が父親に対する嫌悪感を促進的あるいは抑制的に働くのかについて検討した。

その結果、父親に対する嫌悪感の第1因子である「間接的な接触」（ $R^2=0.3489$ ）は、コミュニケーション尺度の第1因子（ $\beta=-0.3478$ 、 $p<0.05$ ）、両親の仲の良さ（ $\beta=0.2101$ 、 $p<0.10$ ）と関係しており、コミュニケーション尺度の第1因子と両親の仲の良さが嫌悪感に対して抑制的に働くという結果を得た。

父親に対する嫌悪感の第2因子である「男性を感じさせる会話や接触」（ $R^2=0.3229$ ）は、コミュニケーション尺度の第1因子である「自己開示」（ $\beta=-0.6707$ 、 $p<0.001$ ）と関係しており、コミュニケーション尺度の第1因子が嫌悪感に対して抑制的に働くという結果を得た。

父親に対する嫌悪感の第3因子である「だらしなさ、所在無さ」（ $R^2=0.5142$ ）は、コミュニケーション尺度の第1因子である「自己開示」（ $\beta=-0.6089$ 、 $p<0.001$ ）と関係しており、コミュニケーション尺度の第1因子が嫌悪感に対して抑制的に働くという結果を得た。

父親に対する嫌悪感の第4因子である「飲食を通しての接触」（ $R^2=0.3206$ ）は、コミュニケーション尺度の第1因子である「自己開示」（ $\beta=-0.2935$ 、 $p<0.10$ ）、両親の仲の良さ（ $\beta=0.2185$ 、 $p<0.10$ ）と関係しており、コミュニケーション尺度の第1因子と両親の仲の良さが嫌悪感に対して抑制的に働くという結果を得た。

IV. 考察

1. 父親に対する嫌悪感得点と因子構造

(1) 父親に対する嫌悪感得点

父親に対する嫌悪感尺度の平均評価点を算出した結果、3,000点以上の高得点を示した

項目は、「No.5 あなたの布団（ベッド）で父親が昼寝をする」、「No.13 父親が使った割り箸を使う」、「No.20 父親があなたに「女らしくなったね」と言う」、「No.12 父親の飲みかけの缶ジュースを飲む」の4項目であった。

これは、父親からしてみれば、児童期まで行っていた行為であろう。しかし青年期になった娘にとっては、嫌悪感を抱く行為として抽出されたと考える。これらは父親に対する不潔感という感情ではなく、男性とを感じるが故の嫌悪感であると考えられる。直接的な肌の接触より、むしろ飲食を通しての間接的な嫌悪感が高得点を示しているのが特徴的である。また、娘からすれば、父親から娘に向けられる「女らしくなった」という発言は、誉め言葉ではないことが分かる。父親として、配慮すべき発言だと考える。

一方、2,000点以下の低得点を示した項目は、「No.16 お父さんと一緒にテレビをみながら話をする」、「No.21 洗濯後のお父さんの下着をたたむ」、「No.18 お父さんが自分の子供の頃の話をする」、「No.6 あなたの下着とお父さんの下着を一緒に洗う」の4項目であった。

このように、下着の洗濯、畳むなどの行為については嫌悪感得点が低いことから、父娘間の関係性が悪化した場合のバロメータになる項目ではないかと考える。父親は娘が嫌がっていると感じているかもしれないが、良好な関係性がある場合には、懸念する必要はないと考える。

（2）父親に対する嫌悪感の因子構造

父親に対する嫌悪感尺度21項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子構造を検討した。その結果、固有値1,000以上の因子として、4因子が抽出された。これまでの調査結果の分析においても、同様な分析方法をとったが、安定した因子構造が得られないという問題を感じるところもあるが、その中で、今後検討するための示唆を与えるものとして、第3因子は、娘が感じる「所在なさ」と「だらしなさ」に関する行為が組み込まれた状態で抽出された。そのため、「No.16 お父さんと一緒にテレビを見ながら話をする」、「No.15 居間にお父さんと二人きりでいる」という内容は、コミュニケーションの内容が問題であるのではないかと考える。父親は、娘と会話を交わす際、お堅い内容は避けた方が良いのではないかと考えた際、「だらしなさ」を感じさせる内容になっている場合に嫌悪感を抱かせてしまうのではないかと考える。第3因子は、著者の調査結果（阿部；2017）では、第1因子「父親とのコミュニケーションに対しての嫌悪感」に組み込まれた項目であった。同学年を対象とした調査である

にも関わらず、このような違いがみられたことから、このコミュニケーションの内容については、今後詳細は検討が必要であると考ええる。

また、第4因子は、飲食を通しての接触に対する嫌悪感であるが、これまでの著者の調査結果（2016, 2017）でも、これらの行為は1つの因子として安定して抽出されており、今後も質問項目として残していくのに相応しいと考える。また、これらの行為は、先述した嫌悪感得点も高得点を示していた。父親からすれば、児童期まで行っていた行為かもしれないが、青年期の娘にとっては、不潔感というより、むしろ飲食を通しての間接的な接触と見做され、嫌悪感を抱かせることになるかと考える。「どうして嫌なのか」などという会話に発展することもあるかもしれない。それもまた娘心を理解できない父親として嫌悪感を抱かせることになるかと考える。

なお、因子負荷量が2因子以上で近似した値を示したため、今回の分析から削除した「No.17 一日の出来事についてお父さんと話をする」と「No.18 お父さんが自分の子供の頃の話をする」は嫌悪感得点が低く、コミュニケーションに関する項目であるため、今後の調査でも残しておきたいと考える。

2. 父親に対する嫌悪感とコミュニケーションとの関係

父親に対する嫌悪感の4因子全てに対して、嫌悪感が低い群において、コミュニケーション尺度の2因子が高い群が分布しているという結果を得た。このように娘が抱く嫌悪感が低いことは、日常生活における父娘の双方向で行われている頻繁な「自己開示」は勿論のことであろうが、それだけでなく「ビジネスライク」なコミュニケーションもプラスに影響を及ぼしていると考えられる。

3. 父親に対する嫌悪感、直接的コミュニケーションおよび両親の仲の良し悪しとの関係

父親に対する嫌悪感の因子ごとの合計得点と、直接的コミュニケーションの因子ごとの合計得点、および両親の仲の良し悪しとの関係について、重回帰分析を実施し、何が父親に対する嫌悪感を促進的あるいは抑制的に働くのかについて検討した結果、父親に対する嫌悪感の4因子全てに対して、コミュニケーション尺度の第1因子である「自己開示」が抑制的に働くという結果を得た。

また父親に対する嫌悪感の第1因子「父親との直接的・間接的な接触に対する嫌悪感」と第4因子「飲食を通しての接触に対する嫌悪感」に対して、両親の仲の良さが抑制的に働

くという結果を得た。

これらのことから、父親に対する嫌悪感は、日常生活において、さり気なく、たわいもないコミュニケーションを取ることが、実は父娘双方にとって自己開示をしていることになり、嫌悪感を抑制することにつながると考える。

更に、両親の仲の良さが、様々な接触に関する行為に対する嫌悪感を抑制することに関係していると考ええる。

V. 引用文献

阿部洋子 (2016). 父親に対する娘の嫌悪感. 跡見学園女子大学コミュニケーション文化, 10, 1-10.

阿部洋子 (2017). 父親に対する娘の嫌悪感と両親の仲の良さおよび直接的コミュニケーション. 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 5, 1-13.

板倉憲政 (2013). 家族内の直接的コミュニケーションと間接的コミュニケーションの関連性—家族満足度との関連性に着目して—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62, 1, 273-282.

小野寺敦子 (1984). 娘からみた父親の魅力. 心理学研究, 55, 289-295.

菅生早映子 (2001). 父親に対する娘の嫌悪感について. 追手門学院大学心理学論集, 9, 11-17.